

ありすがわ たるひと
有栖川宮熾仁親王と出口王仁三郎

落胤問題を実証する (二十)



出口禮子

穴太の火事

「……私ノ所ニ(熾仁親王よりいただいた)守刀ト産着ガアリマス、ソレハ火事ノ時ニ焼ケマシタガ……」

分離第一回公判調書の熾仁親王落胤問題についての聖師の供述に目立つ幾つかの嘘について、先回には私は指摘したが、火事の時に守刀と産着が焼けたという供述も疑わしい。

ここでいう火事とは、曾我部村穴太にある聖師の生家の全焼を指すことは明らかである。大本年表には、どうしてか上田家の火事が記載されていない。発生の月日が不明のせいであろうか。しかし『靈界物語』には、「……それから八十八歳になった喜樂の祖母が亡くなり、百日祭をすました翌日家が焼けてしまったので……」とあり、聖師の祖母上田うのの死は明治三十四年一月七日だから、百日祭は四月十六日、従って火事は翌十七日に発生したと推定される。『大地の母』ではうのの百日祭が

四月十五日になっており、一日ずれているのは私の計算違いで、誌上を借りて訂正しおわびする。

火事についての詳細は『靈界物語』三八卷「呪の釘」、歌集『青嵐』「生家消失」、『大地の母』六卷「元伊勢参り」を参照して頂くとして、その火事を体験した上田幸吉氏(聖師の弟)、小西きみさん(聖師の妹)や村の古老から『大地の母』執筆当時に取材しておいたので、資料として記録しておこう。

当時の上田家は、現在の瑞泉郷の松の位置に南面してあった。部屋は二室のみで、土間はかなり広がった。聖師の生母よね、弟幸吉、妹きみが奥の室で一緒に寝ており、次の間には西田元吉夫婦が寝ていた。出火場所は奥の間の押入れの背面、火の氣のあり得ない場所であり、放火の噂が流れた。歌集『浪の音』によると穴太に火事見舞いに行った四方平蔵が「狂人が軒に火をつけ焼きし後に手を拍ち踊っていたとのことです」と報告している。

上田家の屋敷内、久兵衛池の脇に西田元吉夫婦の鍛冶の仕事場があつた。西田元吉は、和歌山県日高郡上南部村みなべの森為七次男。紀州では、昔から、野鍛冶を業とする者が多かつた。彼は葎田野村おくとじよ（穴太の隣村）奥条で鍛冶職をしていた同じ紀州出身の西田三蔵に若い時から弟子入りし、めきめき腕を上げた。西田が死ぬと、妻いしは、誠実で働き者の元吉を養子にした。いしは、できれば自分と血のつながる娘を元吉の嫁にと望んだ。いしは佐野清吉の娘であり、つまり亡き上田吉松（聖師の戸籍上の父。佐野家から上田家に養子にきた）の妹になる。吉松の長女ゆき（聖師の妹）を選んだ。明治二十一年の晩夏の頃、元吉とゆきは結婚した。山あいの奥条では、家数も少なく、商売にも不便であつた。元吉夫婦は、翌三十二年春、久兵衛池の脇に二間と三間半のこぢんまりした仕事場を建て、鍛冶屋を始めた。葎田野村佐伯でのお礼奉公を終えて帰つてきた、聖師の弟上田幸吉が、元吉にしこまれて打ち手をつとめた。それでも殺到さつとうする注文がこなしきれず、やはり紀州生まれで女房持ちの職人幸之助（仮名）を雇つて、仕事場に住ませた。幸之助は、小幡橋のたもと村倉そくろの隣の鍛冶市（仮名）にしばらく働いていた男である。鍛冶市では、西田元吉出現以来、鎌のさきがけ（研ぎ）すら絶えて商売にならず、幸之助を手放したのである。

明治三十三年八月、西田元吉が大病にかかつた。その原因は

鍛冶市が呪い釘を打ったせいだと聖師が見破り、釘を抜くと元吉の病気が快癒かいゆした顛末てんまつは『大地の母』にくわしい。ところで、呪い釘の一件も、職人幸之助が共謀していたらしいのである。元吉が元氣になり、居づらくなつた幸之助が、やけくそになつて放火したと、上田幸吉氏も小西きみさんも主張している。西田元吉（元教）が死ぬ二、三年前、幸之助と偶然出会つた。そのときに幸之助が「心得違いで悪いことをした」といつて、放火を自白したというのである。

火事の発生は、明治三十四年四月十七日午前一時か二時頃であつたらしい。第一発見者は上田よね。

上田幸吉氏は証言する。

「ぐつすり寝とつたら、母さんが物も言わずにわしを引っぱり起こした。目ざめたら火事や。母さんは、自分の荷物だけまとめて、それを見とつた。長持が二つあつた。一つは押入れの戸襖を背におうて運び出したが、もう一つはあかなんだ。その長持にはたくさんの円山応拳はんの絵と家の系図が入つとつた。応拳はんの絵は一枚一円で買うという人（丸山利一のこと。毎日新聞社版『大地の母』三巻「丸山三代記」参照）があつたのに……」

小西きみさんの証言。

「うちの数え年十歳の年やつた。あの夜、幸吉、西田元吉、ゆき、母、うちの五人が寝ていた。うちは母さんに抱かれて寝とつた

んや。母さんはびっくりして人を起こそうともせんと、一人で荷物を運ぼうとしたらしい。うちが騒ぎで目が覚めた時、母さんは「神さんを出して！仏さんを出して！」と叫んだはった。うちも何か大事なものと思案して、買ってもらいたての下駄一足だけ持つと、次郎松はん（上田次郎松、上田家の分家）とこ、とんで逃げた。後で母さんが「お前は焼け死んだと思ってたら生きていてよかった。おまえを起こすのを忘れていたんや」と言わはるさかい、なんと薄情な人やと腹が立つてたまらなんだ。神さん、仏さん、長持一つは助かった。その長持には、着物が入っていた。応拳はんの絵の入っていた長持は、幸吉兄さんが戸襖をおうて縁までは出したけど、焼けてしもうた」

その夜、風がなく、火柱は高く上がった。火事を知った村の消防団が、竜吐水（手押しポンプ）を運んで駆けつけた。さらに手のあいた男たちは、久兵衛池から手桶で水をくんで消火にあたった。ちょうど上田家では、村の山を買って、薪が天井裏に一杯積んであった。おまけに藁屋根で火の廻りが早く、小さなボロ家が全焼するのは、瞬く間である。周囲に池や小川があつて水が豊富なため、隣家への類焼をまぬがれたのは、不幸中のさいわいであつた。北東の隅の樞かやと北西の隅の椽くの太木は黒こげになつた。とくに椽くの木は、中が空洞で煙突状になつていたので、火が走つた。「大丈夫、根方から二、三尺は青いやろ、やがて芽をふく」

数日後、焼け跡に立つた聖師の言を誰も信じなかつたが、椽も樞も奇跡的に助かり、今日も青い葉を空高く茂らせている。

焼け出された上田よね、幸吉、きみ、西田元吉、妻ゆきは、株内のお政後家の家で十日ほど世話になり、聖師のすすめで綾部に移住した。この火事から十日後、元伊勢へ水の御用、七十五日後に出雲大社へ火の御用に旅立ち、その帰途、開祖と聖師の火水の戦い、つまり言霊戦が開始されるのも、何か因縁めいている。さて、本論に戻つて、上田家の火事で、熾仁親王から拝領の産着と守刀は、本当に焼けてしまつたのだろうか。

上田幸吉氏や小西きみさんの証言のように、確かに長持が一つの絵の入つた長持を後にして、衣類の入つた長持を先に運び出したのか。とつきに上田よねの指示があつたのではなからうか。焼け残つた長持の中に、問題の品が入つていたのではなかつたか。衣類の入つていた長持は、それだけの物であつたのかもしれない。気が転倒して、単に日用品が優先しただけかもしれない。それならば、上田よねが家族を起こす前に、神仏を運び出す前に、自分でまとめた荷物の中に入つていたのではないだろうか。幸吉さんやきみさんは、よねがびっくりしたせいにして、いるが、何より先にせねばならぬことがあつた、と考える方が、気丈なよねの性格にふさわしい気がする。いくら火の廻りが早

かつたとはいえ、第一発見者のよねに、何物にもかえがたい品物を持ち出す余裕さえなかったとは、考えられぬ。またかりに産着は焼けたとしても、守刀は刀身だけでも焼け残つてなければならぬはずではないか。

さらに私が疑問に思うのは、歌集『浪の音』には、四方平蔵の報告として、「前の夜に神の知らせのありしよりたんす箆筒長持は残りましたよ」と記してありながら、同じ聖師の口述になる『靈界物語』には、「…上田家の物は何もかも残らず焼けてしまったが…」とはつきり書いてあることである。公式的には「何もかも焼けてしまった」とする必要が、聖師にあつたと考えられる。だからこそ、焼け残つた大事なものがあつたという疑いが、よけいに私に強まってならぬ。

紋綸子の小袖

二代さまが熾仁親王落胤説を聞かれたのは、梅田安子の証言によれば、三代さまが梅田家に寄宿して京都の武徳殿に通つていられた頃という。その時期は大正四年十一月一日から大正七年六月一日までの間であるが、落胤説の広まった鶴殿親子初参綾以後と推定されるから、大正六年後半より七年前半と考えてよからう。

噂を耳にされた二代さまは、考えるより前に行動に移られる。

綾部から汽車で亀岡へ、そして小一里の道を歩いて穴太へ。聖

師の生母上田よねに問う二代さまの口調には、詰問の響きがあつた。よねは覚悟したようにその噂を肯定し、古い柳行李から証拠の品の白い紋綸子の小袖をとり出しかける。その瞬間、二代さまは夢中で上田家をとび出し走った。気がついた時は、綾部駅と反対の二条駅に降り立っていた。これからどうしようと考え、三代さまが寄宿する梅田家を思い出し、客待ちの人力車夫に声をかけられたのだ。

豪胆な二代さまが、それほど動転されたのも不思議はない。『大地の母』では、次のように表現している。

王仁三郎が有栖川宮の御落胤：否、万々一にもそれだけはいや。乞食の胤であつた方がまだましや、とすみは思う。小さい頃から、寝物語にさえ、すみは母に聞かされている。

「昔の神代は、けつこうな、おだやかな世じゃつた。この天地を生みなされ御守護下さる親神さまを、途中の鼻高神どもが天の神さまにさんげんしよつて、よつてたかつて良へ押し込めてしようた。それからは悪い世、共食いばかりの末法の世じゃ。正しい神々は世に落ちなされて、ちりぢりにさすらうばかり…鬼じゃ鬼じゃと叩きつぶされながら、三千年をこらえこらえて陰から守護なされてきたのやで」

「親神さまを良へ押し込めたんは誰やいな」

と小さなすみは、きつと目を上げて問う。

「上に立つ神々やで。われさえよけら、ひとの難儀はかまわんやり方、強いものがちの、世に出ておいでる守護神やだよ」

そのすみか、こともあろうに、親神さまを良に押しこめ悪とうな世を持ち続けてきた、上に立つ神の血統の男と結婚し、三代の世を継ぐ直日を生んだ。そう思うことは、足元の大地が揺らぐほどの怖れであつた。

この話は、梅田安子さんから、私はよく聞かされた。こうなると、熾仁親王からの拝領品は、聖師の供述による産着と守刀のほか、白綸子の小袖を加えねばならぬ。そしてこれらの品物は、火事にも焼けず、第二次大本事件で警察の手に押収されたのではないか、と私は推理する。だからこそ、裁判長も、聖師の見え透いた嘘を看過したのではなかつたらうか。藪をつついて蛇を出す結果を、恐れたとしか思えないのである。そしてそれらの品物にもう一点、警察の目を逃れて大本事件後にも証拠の品は存在したのである。

短冊

出口住之江叔母の証言である。

「大本事件後、有栖川宮熾仁親王からいただいたという短冊が、ひよっこり綾部で発見されたんやな。警察にとられたと思つとつちやつたさかい、それが出てきて、聖師さまは大喜びやつ

た。ちようど今の出口光平さんの家の二階で、聖師さまは面会に来る人ごとに自慢しとつちやつた」

このことを木庭次守氏に確かめると、木庭氏も記憶しておられた。では、それはいつ頃のことか。

昭和十七年八月七日、聖師夫妻、私の父出口伊佐男の三人が六年八月ぶりに保釈出所してきて、亀岡の中矢田農園に帰られた。そして聖師夫妻がはじめに居をかまえられたのが、現在の出口光平氏宅なのである。隣家（熊野館）には三代さまが住んでおられたが、昭和十八年六月十八日に但馬の竹田別院、もと大本別院の屋敷に転居されると、聖師夫妻がその後に移られる。だから昭和十七年八月から昭和十八年六月までの間の出来事である。私は住之江叔母に質問した。

「どんな短冊でしたか」

「熾仁親王の御名と印と花押がちゃんとあつたで。私は作歌に夢中になつていた頃やさかい、どんな歌でも一度読んだら忘れなんだ。その歌は、今でも覚えていますよ」

そして教えてくれたのが、左の歌である。

わが恋は深山の奥の草なれや 茂さまされど知る人ぞなき

住之江叔母の記憶のおかげで、『大地の母』三巻の冒頭の章「深山の草」を私は書くことができた。何故ならば、この短冊は、一度人々の前にちらと姿を見せたきり、その所在が今もって不明

だからである。きつと大本のどこかに存在するはずであるが……。このように、有栖川宮熾仁親王の落胤を示す物的証拠は、われわれの前から消えてしまった。

聖師の供述の中に「母ノ母親ノ弟ニ当ル人ガ伏見デ俠客ノ大将ヲシテ居リマシタガ、有栖川宮様ガマダオ寺ニ居ラレタ頃其処ニ出入リヲシテ居リ、又料理屋ヲモシテイタノデ：」とあるのをたよりに、私と家内は、伏見の町を歩き廻った。伏見在住の作家西口克巳氏と知り合ったのも、その取材を通してである。しかし母の母親、つまり上田うのの弟の、かんじんの名前が分からないのだから、まるで雲をつかむようなものである。

私の手元に上田吉松（戸籍上の聖師の父）の古い謄本があるが、それによると上田吉松の養母うのは文化十二年二月十一日生、天保八年二月十一日京都府船井郡八木島平民河原弥兵衛長女入籍となっている。うのの兄は言霊学者中村孝道と伝えられるが、河原弥兵衛との関係もはっきりしない。河原弥兵衛の戸籍があれば、中村孝道との関係もわかり、うのの弟の名前を発見できるのだろうが、もしあつても壬申戸籍は見る事ができぬ。八木島周辺のお寺を調べて廻ったが、該当者は見あたらぬ。名も知らぬうのの弟を求めて何日も伏見の街を探索したあげく、ついに手がかりも求められぬまま、あきらめねばならなかった。ところが最近、熾仁親王の歌を思い返して、ふと妙なこ

とに気がついた。もう一度かかげよう。

わが恋は深山の奥の草なれや 茂さまされど知る人ぞなき
深草の二文字が、一首の中に隠されているではないか。

伏見の深草！

伏見は京都の南にあり、今は京都市に含まれるが、歴史的には大阪と京都を結ぶ水陸交通の要地として繁栄し、大名屋敷も数多く存在した独立した町である。江戸時代、京橋附近は淀川を上下する過書船（江戸時代、淀川の通行を特許された船）や京都へ上る高瀬船の発着地であり、京橋を中心に諸問屋旅宿が軒を並べ、旅客の往還、船舶の発着昼夜をわかつたが、殷盛をきわめたものである。私は、京橋付近を中心に、よねの叔父の経営していたという料理屋を探し廻った。この付近にあつたに違いないと、独断的に思いこんでいたのである。しかしその料理屋が深草にあつたことすれば、同じ伏見でも、まるで見当違いを探していたことになる。深草は伏見の北端、というより、京都と伏見の結び目のような位置にあり、熾仁親王が京都から通われるなら、京橋附近より遙かに近いではないか。古くは渡来人秦氏の一つの根拠地であつたそうだが、やがて貴族の別荘地となつて深草の里と呼ばれ、鶉や月の名所として歌枕となつた。それよりも何よりも、小野小町に百夜通つた深草少将の故事にならつて、熾仁親王は、よねの働く料理屋へしげしげと通われたのではなかったか。

よねの叔父の料理屋は伏見の深草にあつたという推理は、しかし推理のままで終わっている。何故ならば、私には『続大地の母』を書くために調べねばならぬことが山積しており、残念なことに深草の地を十分探索する時間的な余裕がない。

輪王寺里坊

「有栖川宮様がマダオ寺二居ラレタ頃其処ニ出入リヲシテ居リ…」と聖師は供述していられる。それでは、よねの叔父が出入りしていたお寺はどこで、そしていつ頃のことを指すのか。

熾仁親王が、元治元年（一八六四）七月の蛤御門の変で長州藩士と策動した疑いにより、父熾仁親王とともに朝参他行ならびに他人面会を厳禁されたことは、すでに書いた。その謹慎期間中の慶応元年六月、御所の東北隅有栖川宮邸のある猿ヶ辻と称する地域を拡張するため屋敷の土地（知行地を官に没収すること）をおおせつけられ、七月一日、その替地として、東山天皇仙洞御所の旧地と普請料などを下賜された。そして新邸竣工までの間、父宮は夷川別邸に、熾仁親王は輪王寺里坊にそれぞれ仮寓されることになり、十月二十八日にお移りになっている。

輪王寺は栃木県日光市にある天台宗の寺。有栖川宮家は輪王寺とはとくにゆかりが深く、七代韶仁親王の弟舜仁入道親王、八代熾仁親王の弟、つまり熾仁親王の叔父に当たる慈性入道親王、

同じく公紹入道親王が輪王寺門跡になっている。その輪王寺里坊が京都にあつたのである。

輪王寺里坊といっても、現在の京都地図には載っていない。しかし天保二年刊行の京都町絵図を見ると、仙洞御所の近く、加茂川と高野川の分岐点加茂大橋のかかる下手、というより荒神橋に近い川ぶちに日光宮御里坊として明記されている。しかし輪王寺里坊の跡が府立医大付属病院になっているといった方が、今の人には理解しやすかろう。里坊は狹隘で、親王の御座所はわずかに二室、その余の室は家臣、侍女ら数人の詰所に当て、他に空室はなかつたという。

聖師の叔父が出入りしていたというお寺は、この輪王寺里坊以外に考えられない。狭客の親分ぐらいで幽閉中の親王の元へ出入りできるだろうか、という当然の疑問がわくが、熾仁親王は、祖母妙勝定院宮が病気の時など姫宮に扮装して駕籠に揺られて見舞いに行つておられるし、『熾仁親王行実』には「親王幽閉、凡そ三年、その間、もとより謹慎を旨とせられしが、一日も国事を懐に忘れず、毎に僧装を為し、頭を頭巾に包み、手には念珠を携へて、あるいは早晨、或は夜半に、同志の公卿等と隠僻の処に会して、時務を討議せらる。その御法衣等は、久しく保存せられ、先年有栖川宮より東京帝室博物館に寄贈せられたり。当時の日記、往復の文書等、亦た少からざりしが、親王

の御思召に因りて、後年火中せられしは、惜みても、なほ余あることといふべく、本章の概して粗略に流れ、往往にして終始を審にし難きも、亦た止むを得ざるなり」とあるのを見ても、他行や他人面会の禁を破つておられたのは、明らかである。

よねの叔父が、輪王寺里坊に出入りしていた理由は何か。私は彼が尊攘志士の一人であったのではないかと想像する。そのころ、新撰組が猛威をふるつており、尊攘志士らの京都での活躍の場はほとんど封じられていた。そんな時、長州と有栖川宮家をつなぐ伝書鳩の役割をはたしていたのではなからうか。よねの叔父が、公卿でも武士でもなく、俠客であつたことが、かえつて怪しまれず都合であつたと思われる。

さらに想像をたくましくすれば、「隠僻の処」の一つに、よねの叔父の経営する伏見の料理屋が考えられる。寺田屋事変、元治甲子の変、坂本龍馬の遭難など、伏見は勤王志士の活躍舞台であり、大阪と京都から示し合わせて会合するには、好適の地である。だがそれを証拠立てようにも、当時の日記、往復の文書などが灰になつてしまつているのだから、『行実』の筆者とともに、強く慨嘆するほかはない。

王政復古

孝明天皇がにわか崩御されたのは、慶応二年十二月二十五

日であつた。将軍家茂の死より五ヶ月の後である。翌三年正月九日、明治天皇の踐祚の式が行われる。さきに和宮の將軍降嫁を画策したことで尊攘派の反感を買い、京都郊外の岩倉村に閉じこもつていた岩倉具視は、義兄中御門経之等とはかり、古例に習つて諸親王、公卿等の幽閉勅免を建議させた。運動は成功し、大赦が行われる。熾仁、熾仁親王父子、山階宮晃親王らおよそ五十名の幽閉が解かれ、また岩倉ら数名の入洛が勅許せられた。新しい幕が開くとともに、主役も入れかわつたのである。

正月二十五日、熾仁親王は朝参他行、他人面会の禁を解かれ、三月二十七日、南隣にある隠殿に転居した。

五月二十八日、熾仁親王は明治天皇の御習字助教を命ぜられ、一ヶ月六度参仕のことに決められる。元々父熾仁親王が安政六年（一八五九）から書道御師範をしていたが、参仕の回数が少ないため、こういう処置がとられたのである。これより父宮の所労の時は特に熾仁親王が代稽古をし、たいてい四、九の日に参仕し、辰半刻（午前八時頃）に参内し、未半刻（午後二時頃）に退出された。八月三十日、將軍慶喜の使者として、若年寄大和守戸田忠至が来邸し、水戸藩主徳川慶篤妹貞子（斉昭第十一女繁姫）を將軍の養女として親王の妻にすることの内意をうかがい出た。

師宮御方水戸中納言妹女繁姫へ御縁談御約束成候処、

今度大樹公御養女に被成進、改メテ御縁組被成度、此段御内

内被仰進候

親王父子に異存なく、勅許もあつて、やがて内約が整つた。しかし幕末の奔流は個人の結婚問題など遠くに押し流し、ようやく入輿の運びとなつたのは、明治三年二月であつた。

慶応三年十月十四日、將軍慶喜は、大政奉還の上表を提出した。幕府は外交の失策に加えて長州征伐に失敗し、さらに薩長兩藩の倒幕の盟約が成るなど、昔日の權威は完全に失墜してゐた。幕権強化に手を尽くしてゐた慶喜も、時勢を洞察し、何らかの形で幕府政治の形態を変更する必要を感じてゐた。そこへ持ち込まれたのが、土佐藩主山内容堂やうどうの建議による大政奉還論である。また数日後には、芸州藩主浅野茂長もろながも、慶喜に大政奉還建白書を提出してゐる。

大政奉還の上表の出された十月十四日、熾仁親王はたまたま明治天皇の習字御稽古の定日なので参内してゐたが、父宮とともににわかには評議に参加する。翌十五日も評議は続く。そしてこの日、慶喜を召して上表勅許の御沙汰があつた。源頼朝が征夷大將軍として府を鎌倉に開いて以来、七百年余続いた武家政治の崩壊であつた。十七日、熾仁親王は、父宮とともに国事御用掛に復任する旨の御沙汰を拝し（父宮は十九日辞退）、以来、しばしば参内して評議に列する。

十二月九日、王政復古の大号令が発せられた。討幕派による

クーデターの成功である。天皇は御学問所に出御、熾仁親王以下諸臣を召し「卿等、国家のために尽力せよ」との勅命を賜い、かつ王政の復古を諭告し、摂政、関白、征夷大將軍、議奏、武家伝奏、国事掛、守護職、所司代等の官職を廃止し、新たに總裁、議定、参与の三職の設置を布告する。そして總裁に有栖川宮熾仁親王が任ぜられた。親王は初め固辞されたが、再三熟思してついに受けられたという。親王は總裁拜命以来、ほとんど連日参内して国事を総覧そうらんされる。

慶応四年一月三日鳥羽伏見の戦い、一月十日慶喜追討令、二月三日いよいよ親征の令が発せられ、九日、親王は東征大総督に任ぜられる。

宮さん宮さん お馬の前にひらひらするのは何じやいな

トコトンヤレトコトンヤレナ

それは朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃないかいな

トコトンヤレトコトンヤレナ

長州萩藩士品川弥二郎作詞、井上馨かおるの愛人、祇園の君尾作曲からなる「都風流トコトンヤレ節」はすでに出陣前から木版でばらまかれ、京の人々の愛唱歌であつた。この春まで幽閉中の熾仁親王を、時勢の波は、王政復古の花形スターにまで押し上げたのである。

(敬称略)